8. イチジクの新しい病害「黒葉枯病」(情報)

「要約]

露地栽培イチジクの葉柄が黒くなり葉枯れを生じる障害は、*Fusi coccum aescul i* Corda 菌による新病害で、「黒葉枯病」と命名する。

研究室名	病虫研究室	連絡先	086- 955- 0543
研究至名	柄虫研究至 	埋 絡先	086-955-0543

「背景・ねらい」

県南部の露地栽培イチジクに、葉柄が黒くなり葉が萎れて葉枯れ症状となる障害が発生したので、原因究明する。

[成果の概要・特徴]

- 1. 症状は8月中旬頃から現れる。初め葉柄と葉身の境目又は葉柄の中央付近が茶褐色となり、次第に黒褐色ないし黒色に変色してやや細くなる(図1右)。その後、葉全体が萎れ、9月頃に落葉する(図1左)。葉以外での発病は認められていない。
- 2. 葉柄の病斑からは Fusi coccum 属菌が高率に分離される。分離菌をイチジク「蓬莱柿」葉柄基部に接種すると約 10 日後には有傷、無傷接種とも葉枯症状が再現され(表 1)、接種菌が再分離される。
- 3. 葉柄病斑部の表面には黒色の分生子殻(図 2 左)を多数生じる。分生子殻は単生で頂部に孔口を有し、黒色、球形、直径 124~352(平均 221)μm である。分生子は無色の分生子柄上に内生出芽・フィアロ型に形成され、初め無色、長楕円形ないし紡錘形、単胞、平滑(図 2 中央)、発芽時には褐色を帯びて 2~3 細胞になるものが多く(図 2 右)、大きさは 10.5~18.1×4.8~7.6(平均 15.6×6.2)μm である。
- 4. 本菌はジャガイモ煎汁培地上で生育が速く、初め白色ないし灰白色、後に灰黒色の 気中菌糸に富む菌叢を呈し、ブラックライトブルー(BLB)照射下で分生子殻の形 成が認められる。本菌は15~35℃で生育し、生育適温は25℃である(データ省略)。

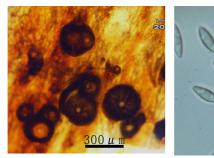
[成果の活用面・留意点]

- 1. 本病に対する登録薬剤はないので、伝染源対策として罹病葉を集めて土中に埋める。
- 2. 「蓬莱柿」以外の品種での発生は不明である。

[具体的データ]



図1 イチジク「蓬莱柿」の葉枯れ症状(左)と葉柄の病斑部(右)





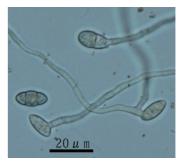


図2 葉柄上の分生子殻(左)、分生子(中央)、分生子の発芽状況(右、 分生子が褐色で2~3細胞となる)

表1 分離菌のイチジク葉柄への病原性

供試菌株	有傷 ^z	無傷
No. 0701-1	4/5 ^y	4/5
No. 0702-1	5/5	5/5
	0/5	0/5

ヹピンセットで穴をあけた後に接種

[その他]

試験研究課題・事業名:病害虫・生育障害の診断と対策指導

予算区分:県単

研究期間:平成19年度

関連情報等:平成20年度日本植物病理学会大会(講要)

^y 発病葉数/接種葉数